

第三章 日本の伝統と宿命

はじめに

私は、より良い人生を生きる術として、易学・姓名学を学んできましたが、それは、人の運命を切り拓くための学問であるとともに、様々な自然界の理を解き明かし、真理に到達しようとする営みであります。

この学問は、古来より先人達の貴重な遺産として、生活慣習、風習などの形で、生活に深く根ざして受け継がれてきたものです。

この易学や運命学に限らず、日本の伝統的な精神文化には、より良く生きるための規範や、智慧が数多く存在しており、その中には日本の未来を切り開く智慧が必ずあるものと、私は信じています。

これまで自らのルーツや、私が学んでいる運命学や姓名学について紹介しましたが、講演、出版と続いたこの一年の中で、様々な著作を読み、諸先輩の教えを受けながら、これまでも思っていたことですが、日本の国の成り立ち、日本人の心、日本の伝統、さらには日本の将来へと想いは膨らみました。

私がこのようなことに対して強く関心を抱いたのは、今日の社会全体の風潮、とりわけモラル（規範意識）の低下に対する危機感があったからです。

昨今の政・財・官はもとより、社会全体のモラルの低下には目を覆うものがあります。数年前、「薬害エイズ問題」が発覚した時には、厚生省の対応の遅さと、人間の尊厳に対する鈍感さに驚かされ、病気になっても安心して医療を受けられないような恐怖を感じましたが、「狂牛病問題」が発生した今、今度は食の安全が疑われています。

本来、業界において指導的な立場に立つべき全農（全国農業協同組合連合会）においても食肉の産地詐称が行われていたということを目の当たりにしては、業界全体の体質まで疑いは増すばかりです。また、たとえば魚の養殖ではどうなのか、農業の現場においてはどうなのかと、疑念は際限なく拡がります。

加えて、大手食品メーカーが、この全国的な混乱の収拾対策として行われた食肉の回収(買い上げ)を不当に利用して、火事場泥棒的な公金詐取を行ったことには、言語道断と言うほかはありません。

また、身近な話では、大手ビールメーカーのビール園で十年以上にわたって生ビールに気の抜けた前日の残りを混ぜて、消費者に飲ませていたことも報じられました。かなり前のことですが、私もビール工場の見学で試飲したビールの味と、直後にビール園で飲んだ味の違いに、妙な違和感を抱いたのですが、まさか薄めたものを飲まされていたとは露ほども疑わなかったものです。

両社とも札幌発祥の企業だけにとっても残念な事件です。利益を追求するあまり、消費者の信頼を裏切る行為には企業倫理のかけらも見られず、許されない憤りを感じますが、心情的には何とか名誉を挽回して欲しい気持ちでございました。しかしながら食品会社が解散に至ったことは、なんともやりきれない思いがします。

これだけの事件や問題が次々と噴出すると、企業や監督官庁に対してだけではなく、日本の社会、さらには日本の国そのものに対する信頼を失ってしまいます。医療や食の安全などは、人間が生きることに関することだけに、このような状況では、日本は先進国であると胸を張って言えないのではないのでしょうか。

狂牛病をめぐる農水省や、外交機密費の横領事件を起こした外務省の対応で、今、公務員のあり方が問われていますが、こういった問題は何も今に始まったことではありません。旧大蔵省や旧厚生省など、十数年来続く官僚の不祥事は枚挙にいとまがなく、腐敗の根はほぼ全省庁にはびこっているとされています。

国民を不安と混乱に陥れ、おごれる体質をさらした今、憲法第十五条二項に明記され

た「すべて公務員は、全体の奉仕者であって、一部の奉仕者ではない」という精神に今一度立ち返らなければなりません。

しかし、行政改革の一環として行われた省庁再編は、公務員・官僚の改革を目指したものであり、官僚主導から政治主導へと切り替えるべく行われたものですが、今現在、その効果はかけらにもうかがうことができません。

公務員を真に「全体の奉仕者」とするためには、官によらない行政改革をやらなければなりません。

日本の官僚は、大臣を送らずに内閣を動かし、議席を占めずに国会を動かし、一貫して国家経営の基軸となってきた最強の政治集団とされています。

国家という権力に守られ、行政権限を一手に掌握するとともに、隠然たる政治力を行使してきたこの集団が、日本の発展、国民生活の向上という高邁な理念を忘れ、組織の利益、個人の利益のために権力を行使し始めると、その自浄作用を期待することはできません。

真の行政改革は政治主導によって進められなければなりません。もちろん、その改革の推進役となるべきは我々議員であり、我々自身が国民の信任を得るためには、政治の改革を同時に行わねばならないことは論を待たないところです。

そして、経済、福祉、教育など様々な社会システムの変革を行い、構造改革を完成させるには、既存の価値観や悪しき因習を打破しうる、並外れた指導力と先見性、そして行動力を持った政治家がいなければ、これを実現することは不可能に近いと思われます。

この混迷を極める日本の社会の進むべき道を示し、その道を進むために様々な変革を行うことは、非常に困難であり、身命を賭して臨まなければ解決できない問題ですが、日本の行く末はひとえにこの改革にかかっていると言っても過言ではありません。それだけに小泉総理には微動だにしない気迫をもって、ぜひともやり遂げていただきたいと念じる毎日です。

さて、今日の日本は、どうしてこのような状況に陥ってしまったのか、わが国の歴史を辿って原因を紐解いてみたいと思います。

結果には必ずその原因があるからです。

日本の伝統的精神文化

本年六月、サッカー・ワールドカップが、史上初の日韓共催で開催されました。札幌ドームでの熱戦が、札幌の魅力と一緒に世界に発信できたことは、市民の一人として大きな喜びでした。

天皇陛下が、桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であることを踏まえたご発言をされたこともあって、気運は大いに盛り上がり、大会も成功裡に終えることができたことは、慶賀の至りです。

天皇ご自身が韓国とのゆかりに言及されたことには多少の驚きもありましたが、地理的にも歴史的にも最も近く、かかわりの深い国に対するご配慮に、新しい時代の到来を感じたものです。

中国・三国時代の魏の時代、邪馬台国の女王・卑弥呼に、魏の国から青龍三年鏡が一〇〇枚贈られたことが、魏志倭人伝に記されています。このように、日本は有史以来、中国、朝鮮半島などの近隣諸国とは、特別に深い関係があり、仏教、儒教、道教など大陸発祥の東洋思想の影響を強く受け歴史を重ねてきました。

これら伝来の思想を、日本人は、旧来の民族信仰を排斥することなく、巧みに融合させながら受け容れています。例えば、中国では「天」という観念はあっても「神」の観念はありませんが、日本においては「天」を「神」に置きかえて受け容れています。

また、聖徳太子の「神仏習合」に見られるように、仏教も日本的宗教、思想として巧みにアレンジして受け容れたことにより、国民に伝わり広まっていきました。

今日においても、仏壇と神棚の両方を有している家が多いということを見てもお分か

りいただけるとおり、まったく違和感なく国民に受け容れられていったのです。

さらに、歴史を重ねる中で、仏教や儒教、道教の世界観や人生観、倫理観など、そのエッセンスが宗教と言う枠を離れて、日本独自の精神文化として融合、昇華し、日本の心、日本人の精神というものが確立されました。

その精神は、信義を重んじ、礼節を知り、忠孝を尊ぶものであるとともに、まさに「和」という相互理解・相互扶助を基本としたものであり、人間が生きていく上で最も必要な考え方として、人々の暮らしの中に深く浸透し、社会に根付いていったのです。

江戸末期までの千年以上の間に培われた、日本人の文化性を物語る外国人の記述があります。

「日本は、西欧社会に遅れていた分、道徳性を高めていたと言える。住居、往来は、極めて念入りに清掃されており、清潔の極みである。往来で人力車と大八車が出会い頭に衝突しそうになったが、お互いに頭を下げて、いい争いにもならない。驚くべきことだ。人力車夫の礼儀正しさ、日本人の動物に対するやさしさ、外国人に対する寛容さ、日本の安全さ、日本人の生活の随所に表れている美的センスや自然への愛、いずれもアメリカより優れている。」

これは、幕末から明治に日本を訪れ、初めて日本の社会に接した外国人の日本人観です。江戸時代三〇〇年の鎖国により、技術水準においては欧米と比べるべくもありませんが、東洋思想の咀嚼の上に生まれた日本の社会の道徳性を端的に表わしています。さて、それでは、現代の日本人は、外国人の目にはどう映っているのでしょうか。今度は、とりわけ日本とかかわりの深い台湾や韓国の人たちが日本をどう見ているのか、ある月刊誌に掲載された二人の方のインタビューを紹介します。

「リップンチェンシン」一戦後、台湾で自然発生的に生まれた言葉だといいます。この言葉に込められた台湾人の思いとは、一体どんなものでしょう。

台湾台北市に生まれ、早稲田大学、同大学院を卒業し、知日派として知られる金美齡氏（六八歳）は、日本の統治時代とその後の思い出を語る中で次のように述べていま

す。「私は終戦の時十一歳だった。私が台湾と日本との関係を考えるとき、一番最初に思い浮かぶのは、日本人や日本人の兵士がとても優しく、信頼できる存在だった記憶だ。戦前からの日本人に対する台湾人のイメージは、清潔、公正、誠実、正直、信頼、責任感、規律遵守、滅私奉公等々だが、戦後になって、その後の国情に照らし自然発生的に生まれた言葉が『日本精神』（リップンチェンシン）なのだ。

かつて戦時中に宣伝された『日本精神』には偏狭な部分もあるが、真の『日本精神』を台湾語読みして生まれた『日本精神』という新造語には、台湾人が日本時代は良かったと感じたすべての言葉が凝縮されており、台湾人の間に今でもプラスイメージとして語られている。

『あの人は日本精神だから』といえ、台湾人は皆、勤勉で働き者で正直でルールを守って・・・というようなイメージをその人に抱く。

台湾の日本統治で一番良かったのは教育の普及、次に鉄道などのインフラ整備だ。日本は過去の歴史を侵略だったと自虐的に否定しているが、本当に反省するのは戦前ではなく戦後のようだ。戦後の日本は背筋が伸びていない。勇気をもって自己の筋を通していかない。

戦後の日本は戦うことを捨てている。戦いとは何も鉄砲担いで戦争することではなく、葛藤や緊張に耐えることも戦いだ。戦後の日本は葛藤や緊張感に耐える訓練を放棄した結果、まるで骨が抜けた卑屈な国になってしまった。毅然とした意思力を持った国家へと変貌して欲しい。」

もう一人、「ワサビと唐辛子」の著書を出すなど、日韓の文化の違いを的確に論じ、大反響を受けた韓国、済州島生まれの呉善花氏（四六歳）は、韓国人が見た「和の国・日本社会の魅力」についてこう語っています。

「ワサビと唐辛子は、いずれも香辛料で辛いのだが、食べた時の体の反応がまったく違う。ワサビを食べると血液は心臓に集まり、鎮静作用が働いて精神に落ち着きをもたらすが、唐辛子は血液が脳に集まってきて、そこから全身に広がり精神的に興奮し

やすくなる。吸収と発散、受身と能動という日韓両国の国民性を、それぞれの代表的な香辛料が象徴している。

両国の発想の違いが端的に表れているのが言葉だ。日本語では受身形が日常語で頻繁に使われているが、韓国語ではほとんど使わない。日本では柔らかい人間関係を保つことやトラブルを回避するために、受身形が多いのだと思うが、韓国語は日本語のように動詞が受身化する用法はほとんどない。

例えば、タクシーに乗ろうとして、他の人が先に止めてしまった場合、日本人は『(私は)先に乗られちゃった』と言うが、韓国人は『あの人が乗っちゃった』と言う。日本人の場合、受身表現により責任を自分自身に持ってくるが、韓国人は相手に責任を負わせる表現となる。

この言葉の用法の違いは、そのまま両国民の国民性の違いになっている。受身の姿勢を日本人は謙虚と受け取るが、韓国人は弱々しく不安に思う。日本人は『お願いします』を多用するが、韓国人にはそれが卑屈に見える。

極端に言えば、日本人と韓国人とでは善と悪が逆だと言っていいほど、発想や考え方に違いがある。

また、同じ儒教の影響を受けていながらも、韓国では『孝』が最上位に位置付けられており、日本では『忠』が『孝』の上に来る。血族社会の韓国と非血族を含む『イエ(家)』社会の日本との違いだ。韓国では最後に頼れるのは血のつながりしかないが、日本では血縁がなくとも、『イエ』(グループ)の中に入れてもらえば安心だ。

韓国の血族本位にもそれ自体意義はある。しかし、家族を離れた社会集団への帰属意識は極端に弱い。

日本に来て印象深いのは、超近代的な社会でありながら、精神的な面では何か前近代的、原始的な匂いを感じる場所である。前近代的とは、人間付き合いでいえば相手の心の中まで察しようとする事である。近代的な合理主義では形だけ、表面だけで見てしまうが、前近代的、原始的なものは、内面的なものに迫ろうとする。日本人に

はそれを強く感じた。日本人の心の中には、相手を認め、肯定的に受け容れようとする意識が強く存在し、それが『イエ』や『ムラ』などの共同体ができる理由だと思われる。

阪神淡路大震災の際の被災者同士の助け合いや互いにかばいあう姿が世界から賞賛を受けたが、韓国でも、お互いに協力している「和」の姿に学ぶべきだと、驚きとともに賞賛された。韓国がこれほど日本を褒めたのは初めてのことだったが、もう韓国も、今回のように素直に良いものは良いと評価してよい時期だと思う。」

二人とも、知日家だけに、日本人以上に日本人の精神を洞察していることに驚きを禁じ得ません。しかしまた、伝統的、精神的な美德を失った日本人に対する痛烈な批判でもあります。今一度、国民すべてが真摯に耳を傾け、矜持を取り戻すべきであると思います。

「和」の精神と「恥」の文化

さて、この日本人の精神とはどのようなものかについてももう少し詳しく触れてみたいと思います。

そもそも「和風」「洋風」というように、「和」と言えば日本自体を指す言葉ともなっていますが、この「和」という言葉は、六〇四年に聖徳太子が制定した日本最初の成文憲法と言われる「十七条の憲法」にすでに表れています。この憲法の第一条は「和をもって貴しと成す」の言葉で始まっており、まさに太古の昔から和には和をもって応じるという調和の精神が、日本人に特徴的なメンタリティ（精神的性向）であったことをしのばせます。

文化人類学について詳しく学んだわけではありませんが、このようなメンタリティは、日本人が農耕民族であったこと、小さな島国であったために外敵の脅威にさらされることなく、平和な歴史を積み重ねてきたことと深くかかわっているように思われます。そもそも、農耕民族の場合は、共同で同じ農耕に従事することによって収穫が増える

ことから、共通の目標を実現するために、相互理解と相互扶助を共通の意識とすることができました。しかし、狩猟民族である欧米人においては、限られた獲物を収奪するための争いが基本にあり、そのために和や調和といった考え方よりも、むしろ紛争や対立を調整するための権利や義務、さらには契約という意識が発達していったようです。

また、アジア大陸の中国や韓国の場合は、同じアジア人で農耕民族でありながらも、長い紛争や侵略の歴史の中で、欧米人に近いメンタリティが培われていったようです。もうひとつ日本人の特徴的なメンタリティをあげるとすれば、それは「恥の文化」と言われるものでしょう。

この「恥」とは、ふだん日常会話で使われる「恥ずかしい」よりも奥の深い言葉で、その奥底には武士道精神がかかわっています。さて、武士にとっての「恥」とはいったいなんだったのでしょうか。

江戸時代に武士道について書物としてまとめられたものが二つあります。水戸黄門（水戸光圀）で有名な水戸藩のものと、九州の鍋島藩で「葉隠」の名でまとめられたものです。

前者は、当時の江戸幕府の武士の心得として作られたもので、現代で言えば政治家や公務員の倫理規定に当たるものといえます。そこでは、「仁」「義」「礼」「智」「信」という「人倫五常の道」を守るべしとされ、それにもとることが武士としての名（名誉）を汚すことであり、イコール「恥」でした。

また、後者の「葉隠」においては、武士の心得として「四誓願」というものがあり、次のようにしたためられています。

- 「一、 武士道において遅れ取り申すまじき事」
- 「二、 主君の御用に立つべき事」
- 「三、 親に孝行仕るべき事」
- 「四、 大慈悲を起こし人の為になるべき事」

意外に思う方もいるでしょうが、常に内省し、道を踏み外すことのないよう自己研鑽に励むこと。忠や孝を尊ぶこと。思いやりの心で人の為に尽くすこと。このようなことが武士道の中心に据えられています。

「武士道」といえばカビ臭さを連想される方や、軍国主義のにおいを感じる方もいらっしゃるでしょうが、武士道の根底には、人として生きるために最も大切なものが流れていると私は感じています。

天皇制の意義

日本人の精神的伝統を語る時に、ぜひとも触れておきたいことがあります。それは、天皇制についてです。

天皇制や皇室に関しては様々な意見があり、現在の日本国憲法がその存在を「象徴」としていることも十分わきまえた上で、私の考え方を述べたいと思います。

天皇制自体を批判する意見の中には、あたかも天皇制イコール戦前の軍国主義、全体主義の象徴であるかのように批判するものもありますが、あまりにも近視眼的な捉え方であり、的を射ていないと言わざるを得ません。

国家を構成するには、家庭や地域社会があってはじめて完成しますが、日本民族は天皇というシンボルを拠り所に国家を形成してきた歴史があります。

ここで言う「シンボル」には二つの意味があります。一つは国を代表する存在であるということ、そして、もう一つは、国民の心の拠り所として機能してきたということです。

昔から国というものは領土と国民だけではなく、国家としての一体性を保つための組織（行政機構）を備えて初めて国として成立しました。「国を代表」してきたということは、天皇がこの組織の頂点に常に位置してきたということです。

中世の貴族社会が崩れ去り、鎌倉時代から江戸時代まで七〇〇年あまり続いた武家社会においても、天皇制は堅持されましたが、これは実に驚くべきことと言えます。な

ぜなら、欧米諸国では、長い歴史の中で社会体制の大きな転換期においては、時の王朝は必ずと言っていいほど滅んでいます。アジアに目を転じましても、中国の歴史では、旧皇帝・国王の一族はおよそ根絶やしと言っていいほど苛烈な粛清が行われています。

しかし、日本においては天皇制が今日に至るまで堅持されてきたということは、天皇自身が持つ権力やカリスマ性といったものを超えて、日本人にとって、ひとつの心の拠り所となっていることの証しではないでしょうか。

私は、日本の伝統の最たるものは天皇制であり、連綿と続く皇室の系譜は、世界に類例のない誇るべきものであり、悠久の歴史の中で引き継がれていく日本の文化の象徴ともいうべきものと考えています。

また同時に、天皇ご自身は、ある意味で日本人のアイデンティティであり、日本人の伝統的な精神文化を体現する存在であると思っています。

本年二月十一日、皇紀二六六二年建国記念日の「奉祝道民の集い」において、日本会議北海道本部議長の上田三三生先生の「昭和天皇をお育てした人々」と題してのご講演がありました。文字通り、幼少時代の昭和天皇とご養育係との関係をお話しされたのですが、海軍中将川村純義から始まり、札幌出身の足立タカ（後の鈴木貫太郎総理大臣夫人）、乃木希典、東郷平八郎、杉浦重剛と話は進みました。その内容は、たとえ天皇となられるお方であっても、わがままや甘やかしは一切許されず、躰や倫理、修身、道徳といった基本的な教えを凜としてお受けになった立派なお姿を、まるで天皇と養育係が目前におられるような生き生きとした描写でお話し頂いたことは、聴く者に大きな感動と感銘を与えました。

天皇ご自身は、まさに日本の象徴として、日本人の良心や美徳を体現すべき存在としての教育を受けられてきたわけです。

しかし、天皇が倫理や修身、道徳の教育を受けられたと聞くと、それは何か天皇だけの特別な教育のように思われるかもしれませんがそうではありません。躰や道徳は、

かつては誰もが家庭や暮らしの中で当たり前のように経験し、身に付けてきたものなのです。

今日、親子で三、四人の家族がほとんどですが、かつては祖父母、両親、子供がひとつ屋根の下で暮らす十人以上の大家族が大半でした。

両親の共働きも、農家においてはごく当たり前のことでした。両親が仕事の間、子供たちの世話をするのは、祖父母や年長の子供たちの役割で、炊事、洗濯などの手伝いも役割分担されており、そこには助け合いの精神がありました。

暮らしは決して楽でなくても、夕食の一家団欒のひとつときは、子供たちとその日の出来事を語らう絶好のコミュニケーションの場であり、温もりと笑いがありました。

また、祖父母に対して敬意を払い、かいがいしく面倒をみる父母の姿を見ながら子供たちは育ち、祖父母の智慧は子供へ、そして孫へと受け継がれていきました。ある意味では、社会の縮図が家の中にあっただのです。

また、家の外に目を転じてみましても、子供たちのケンカは日常茶飯事でしたが、いたわりやかばい合いがあったし、暮らしの中に躰があり、節度や自制心、生きる知恵や力を集団の中で経験として学び、身につけていきました。

学校においても同様で、ケンカになったり、いじめたり、いじめられたとしても、実生活の中で節度や自制心を学びとっているために、大事には至ることはなかったのです。また、親と子の信頼と同様に、教師と親の信頼関係は強固であり、子供が教師の言うことを聞かない時は、敢えて体罰（愛のムチ）を容認する雰囲気がありました。それほどに教員と親、そして子供たちの間には共感と信頼があったのです。

伝統的精神文化の崩壊

しかし、今日、このような日本人の精神文化は、なぜ崩れてしまったのでしょうか。なぜ社会全体のモラルが低下し、次から次へと問題が起きているのか、もう少し、日本の歴史を振り返ってみます。

日本の精神文化崩壊の兆候は、ペリー来航の時に始まりました。西洋思想の流入です。先ほど幕末・明治期の日本についての外国人の記述を紹介しましたが、明治維新以降、欧米の技術力や国力を目の当たりにした日本は、西洋思想の影響を受けた文明開化の大合唱で、欧米列強に追いつけ追い越せと、猛烈な勢いで近代化を押し進めました。この時、明治政府は、工業化と同時に教育立国を目指し、教育に大いに力を注ぎました。これは、十分評価されるべきことと私は思います。しかし、残念なことに、その後欧米の帝国主義、植民地主義の影響もあり、富国強兵政策へと傾倒していくこととなります。

しかし、この時点ではまだ、日本の伝統的な精神的文化は揺らぎつつも崩れてはいません。決定的な崩壊を迎えるのは第二次世界大戦の敗戦によってです。

そもそも無謀な戦いであった大東亜戦争（太平洋戦争）が、有史以来初めての敗戦という形で終結した時、国民の誰もがショックを受け、屈辱と挫折感に打ちのめされ、果ては自信喪失へと陥っていきました。

当時、アメリカをはじめ連合国は、戦勝国の当然の権利行使として、それまでの日本の旧体制の解体と、さらには精神の解体まで図ったのです。それは、戦後の憲法、教育基本法などの法律の改正、行政組織の再編、財閥の解体などありとあらゆる分野に及びました。

この激変の中で、それまで戦争を煽ってきたマスコミも手のひらを返したように、過去の全てを否定したため、国民の考え方もそれに追随しました。今考えてみると過剰とも言える反応でしたが、敗戦の失意と窮乏のどん底では、否定せざるを得なかったのです。

戦後の荒廃から立ち直るには、それも仕方の無いことでした。アメリカ的な発想、西洋的ものの考え方で復興を目指したのは、ある意味では時代の流れだったと言えます。その後、日本人が生来持っていた勤勉さと国を挙げての努力によって、日本は目を見張る復興を果たし、遂には、世界第二位の経済大国にのし上がりました。奇跡としか

形容できないことでしたが、拡大発展を基調とする西洋的ものの考え方の結果でした。その結果、国民は、今まで考えられなかったような便利さや快適さを手中にし、お金さえあれば欲しい物は何でも手に入る世の中になったのです。

さて、敗戦国から復興したわが国は、とにもかくにも経済大国にのし上がり、豊かさや便利さを手にしたのですが、急激な経済発展は、同時に日本の社会に多くの歪みをもたらしました。

まず、都市への人口集中です。昭和三〇年代前半から、東京オリンピック時には、一年に三〇万人の人口が東京へと集中しました。大阪万博の時は、二〇万人の流入があったと言われています。

都市への人口集中は、札幌をはじめ他の大都市も同様であり、今日に至るまで続いています。都市への人口集中は地方を過疎へと追いやり、農村や漁村では深刻な後継者不足に陥りました。また、過密状態を呈する都市では、住宅不足が顕著となってきたため、国や自治体は、増加する人口の受け容れのために「団地」という名の公営住宅を用意しました。しかし、そこには田舎や地方でのように大家族が住めるスペースはありません。しかも、年老いた祖父母や親たちは、住み慣れた土地を離れようとはしませんでした。このため、当然の帰結として、核家族化が進行していきました。

また、都市での暮らしは便利で一見豊かですが、生活費もかさむため高収入高支出の生活です。一方、経済の急速な発展は女性の労働力も必要としました。増加する生活費や教育費を捻出するために、夫婦共働きが増加していきます。

このような社会の変化は、女性の自立や社会進出を促進する要因ともなりましたが、その一方で、核家族化した家庭では、子供がテレビやゲームに興じながら両親の帰宅を待つ「カギっ子」が生まれました。帰宅した親は、甘える子供に可愛さのあまり、わがままや勝手を許し、ねだるものを要求通りに買って与えました。しかし、親子で共有する時間は少なくなり、勢いその結果は放任につながりました。

そこには一家団欒でのコミュニケーションはもちろん、叱られることもなく、かつて

の大家族の時にあったような躰や集団での学びもありません。これでは、心の絆が希薄となり、個人主義的な価値観が中心になっていくのは当然の結果でした。

また、高度成長がもたらした豊かさは、国民の社会に対する意識の変化も生み出しました。

経済の成長に伴い、シビルミニマムといわれる水道・下水、道路などの社会基盤整備や住宅整備が急ピッチで進められました。それにより、これまでは地域の住民が全員で取り組まなければならなかった問題が次々と解消されていきました。

下水道の普及により町内会総出でやらなければならなかったドブ川の掃除（側溝清掃）がなくなりました。道路を街灯が照らすようになり、長屋が消え去り、立派な住宅が建てられるようになると、防火や防犯のための見回りなども不要となりました。

こうして、今まで必要とされていた地域の協力が不要となって、社会とのかかわりがだんだんと希薄になる素地ができあがったところに、さらに拍車をかけたのが経済的なゆとりです。

所得水準の向上に伴って、冷蔵庫や洗濯機、カラーテレビ、ステレオ、さらには車と、家の中の暮らしを豊かで、便利にする耐久消費財が入手できるようになると、国民の目は、自然と家の中へと向けられるようになりました。そして「マイホーム主義」という言葉に端的に表現されるように、家の中での小さな幸せを求めることが国民にとっての最大の関心事となったのです。いわば「箱庭的な価値観」とも言うべきものです。

目が社会に向かずに、もっぱら家の中に向くことによって、「世間の目を気にする」ということもなくなり、自然と公德心も忘れられていったような気がします。

物質的には、家庭も社会も豊かになったのですが、精神的には貧しくなったように思われます。「衣食足りて礼節を知る」という言葉がありますが、豊かさの中で大切なものを忘れていくこと、ありあまる豊かさがもたらした問題を考えるべき時代が到来

しています。

わが国は驚異的な経済発展によって、豊かさや便利さを手にしたのですが、失った物はそれ以上に大きかったと私は思います。

拡大発展の西洋的考え方は、ともすれば自然との共生を忘れ、人間本位の考え方に陥ります。生活の便利さ、快適さのみを追求した高度成長社会でのエネルギーや資源の浪費によって、地球温暖化問題をはじめとする環境問題が深刻化していますが、あたかも人間自身が自然の逆襲を受けているかのようにも映ります。

それと同様に、日本人は礼節や隣人愛といった、人間として生きるために最も基本的なものを失いつつあることに、我々は気づかなければなりません。

わが国の根幹を支えてきた礼節や日本の精神といったものが社会から失われつつありますが、その背景には、社会の変化、意識の変化によって、家庭では躰がなされていない、学校では教育らしい教育ができない、という状況になりました。急激な経済発展と社会変化への対応を国が怠ったからなのです。

その結果、今、家庭や学校など教育の現場では、予想以上に深刻な事態が起きています。

家庭教育、学校教育の荒廃

数年前、北海道で起きたことです。ある街の三〇歳代の女性教師宅で、連夜、幼児の異常な泣き声が続いたそうです。教師宅であったことから、近所の人たちも、まさかとの思いからあまり気に留めないでいたのですが、そのあまりのひどさから不審に思ったとなりの人が関係機関に通報したところ、幼児虐待が行われていたのです。母親であり、教師でもある人間が実の子供を虐待していたことは驚くべきことでした。

この事件を、母親としての愛情の問題、教師としての倫理観の欠如と決め付け、片付けてしまうことは簡単です。しかし、今日の若い母親たちが置かれた環境を考えると、育児に対する知識の不足や不安に悩まされている事情も理解できるどころです。

以前から児童虐待問題がなかったわけではありませんが、昨今の急増ぶりには暗澹たる気持ちになります。

核家族化が進み、地域の連帯が希薄となった今日では、若い母親たちは育児を実際に見た経験も少なく、悩みを相談する相手もなく、手伝ってくれる人間は望むべくもない、孤独な状況に置かれていることも少なくありません。

そうした心理的なストレスが虐待の引き金となってしまふのは想像に難くないところですが、そのことが子供への虐待の正当な理由になるはずがないことは申すまでもありません。

児童虐待は、虐待されて育った子供が大人になって、今度は自分の子供に同じ虐待を繰り返す—「被害者が加害者となる」というケースが非常に多いというところに悲惨な実態があります。この児童虐待の世代間継承率は、平成十二年度の調査結果では四〇%（札幌においては三四%）という驚くべき数値となっています。

虐待にあった子供たちには暴力肯定的な傾向が表れたり、PTSD（心的外傷後ストレス障害）により社会への適応がうまく行かず、そのストレスによって虐待行為に至るといったことのようにです。そして、「虐待された子どもが親になってこれを繰り返し、その子どもが親になってまた子供を虐待する。そのようにして生まれた子供たちには、大脳の前頭葉（大脳の前半部にあり、感情や思考など高度な機能を司る部分）に異常が現れる。」との見解も研究者によって発表されました。そうして生まれ育った子供たちは、感情や思考の重要な部分が欠落し、いわゆる「キレる」といった状態に陥りやすいとも言われています。

大脳の異常まで行かずとも、今日のいわゆる「キレやすい子供たち」が、被害者ではなく、逆の加害者の立場となるケースも近年急増しています。

今、いじめや登校拒否の増加に伴い、教師の指導力不足が指摘されています。極端な例では、子供たちに集団で騒がれるとどうすることもできず、立往生し、教室から逃げ出す教師がいると聞きますが、少年非行の低年齢化、凶悪化が顕著となっているこ

とを考え合わせると、笑いごとでは済まされません。

一月二十七日には、東京都東村山市で、中学二年の男子生徒らがホームレスの男性を集団で暴行し、死に至らしめました。この事件では、ホームレスという弱者が狙われたのですが、犯行動機は「叱られた」ことへの仕返しだったとのこと。

前日、中学生らは図書館で騒いだことなどを男性に注意されたため、男性の寝泊り場所を突き止めた上で犯行に及んでいます。ホームレスという弱者が狙われた事件でしたが、他人の子を叱った大人が逆恨みされた事件であり、「叱る教育」を怠ったことによる悲劇とも言えます。

今、大人たちに他人の子を叱る勇気が求められていますが、それ以前に、親や先生が家庭や学校でもっときちんと叱るべきであることは言うまでもありません。幼児期から、上手に叱り、叱られたら素直に反省する癖をつけておくことの大切さを、改めて思い知らされた事件です。

各種の調査で、子供の躰が満足にされていない家庭が非常に多いということが判っていますが、そもそもの問題は親自身が躰をされないで大人になっているため、自分の子供に躰をするどころか、育てられないでいるのが実情だということです。そして、そういう子供たちが、また大人になって社会を構成していくわけです。考えただけで戦慄を覚えます。

そのような子供たちが通う学校では悩みは尽きません。二月九日の毎日新聞の投稿欄に、「教師に『殺すぞ』と暴言を吐く生徒」の見出しで、四十一歳になる大阪市の現職教員の悩みが掲載されていました。

『うるさいんじゃ。殺すぞ』

「中学校の教員の『チャイムが鳴ったので、教室に入りなさい。』といった注意に対してすら、生徒からこういった暴言がある。また、注意すると、教員に対する暴力に発展することもある。

荒れている生徒は様々な事情で追い詰められた精神状態にある。その悲鳴のようなも

のが、彼らの『殺すぞ』の中に聞こえる。

しかし、教員も人間である。『殺すぞ』などの暴言を毎日のようにあびせられ続けると、精神的にズタズタになる。すべてを自分の指導力不足のためと考えて落ち込んだり、休職をするケースもある。

社会の様々なひずみが、弱いところ弱いところへとシワ寄せされていく。それを何とか受け止めようとしている防波堤の一つが、公立学校なのだろうか。

考えれば考えるほど暗い気分になる。」

この教員は、生徒の発した「殺すぞ」の暴言の中に、彼らの悲鳴が聞こえたと言っていますが、行間ににじむのは教員の悲鳴であり、どうしようもない苦悩を教員自身が抱えていることが浮き彫りになっています。そこには教師と生徒の信頼関係がまったく存在しないのです。

このようなことは全国の学校で日常起きているのだから問題は深刻です。

今日の教育現場の荒廃とは比較にならないかもしれませんが、私の中学時代にも教師への信頼を揺るがす、忘れられない出来事がありました。

昭和三十五年、中学三年生のことでしたが、私は、校長と担任教師の信じられない光景を見たことがあります。校長室での出来事でしたが、校長の椅子に担任が座り、机に靴を履いたまま足を投げ出し、その前で校長が担任にぺこぺこ頭を下げていました。後に知ったことですが、担任の教師は日教組の分会支部長で、校長室で労務交渉をしていたのでした。

学校という教育現場では、校内行事や指導方法など全ての運営は、教員の多数決で決定するという不文律がありました。そのため、労働組合主導の学校運営が行われており、少数派である校長・教頭は常にお願いをする立場に置かれていたらしいのです。

これでは、国旗掲揚や国歌斉唱が行われぬのも当然と言えましょう。

私は、ここまで述べてきた日本人としての美德、矜持、誇り、郷土への愛着などとともに、伝統的な文化を子孫に引き継いでいくことは、私たちの当然の責務であると思

います。そして、それは日本人の父母から生を受けた私たちすべてに共感できることであると信じています。

また、国旗国歌の是非は別にしても、子供に礼節を説く教師の校長室での光景を目にして以来、私はこの教師が嫌いになり、信頼感を持たなくなってしまいました。その後、この教師は別の中学校の校長になったのですが、とても不思議でした。そこではどんな教育が行われたのでしょうか。

さて、昨今の深刻な事態に、政府もようやく重い腰を上げました。親など保護者による虐待行為で、児童の生命が奪われる事件が後を絶たないことから、防止策として、平成十二年十一月二十日に「児童虐待の防止に関する法律」が施行されました。

また、社会を震撼させる少年による凶悪犯罪が相次いで発生していることから、平成十三年四月一日からは、「少年法」が改正され、十六歳から十四歳に刑事罰対象年齢が引き下げられました。

法整備がなされたことは一応評価するものの、これで問題が解決できるとは思えません。なぜなら、このような法整備はいわば対症療法であり、根本的な原因、問題が放置されているからです。

今、まさに必要とされているのは、家庭、学校における教育の改革です。この一語に尽きると私は考えます。

教育は国家百年の大計

教育が人間にとっていかに大切で、必要かということは、太古の時代から言われてきました。

今から二千年以上前、孟子は「性善説」を打ち立て、荀子は「性悪説」を主張したことは有名です。孟子は「人間の本性は善であり、仁・義を先天的に具有するが道徳を怠ってはならない」と主張したのですが、孟子の一五〇年後、荀子は「人間の本性は悪である。従って、礼法による秩序維持が必要」と主張しました。全く相反する人間

性善・性悪の両説ですが、どちらも人間には教育が必要不可欠だという点では一致しています。

人間の善悪を考えた時に、最も凶悪な行為（犯罪）は殺人です。最近起きた無差別殺人などは、非道極まりない最悪の犯罪ですが、それでは、犯人には良心のかけらもないのかと考えた時には、一抹の良心を否定しきれものではないと思います。つまり、人間は善悪の両性を持っているのですが、悪の力に負けたときには犯罪を犯してしまうものだと思うのです。

また、無差別殺人の代名詞は戦争であり、いかに理屈を付けようとも戦争は殺し合いでしかありません。そのような戦争に大義名分は存在しないはずですが、現実には、今この時にも、国がそれぞれに正義を主張して、大義のもとに世界各地で戦争が続いています。古今東西を問わず、人類の歴史は戦争と殺戮の歴史と言っても過言ではなく、人類は最悪の重罪を犯し続けていることとなります。

しかし、この戦争という、人道にもとる行為自体は当然に「悪」なのですが、その当事者たる国を「悪」と断定しきれのでしょうか。戦争の当事者は双方とも正義（善）を主張して戦っているわけですから大変難しい問題です。立場やものの見方を変えるだけで、善が悪に変わってしまうことも現実にはあるわけですが、また、歴史を見ても、当時は悪と判定されたものが、後世において善と評価し直される例は、その逆を含めて数多く見受けられます。そのような相対性を善や悪は内在しているわけです。

私は以前から性善・性悪の両者の説には非常に関心を持っておりました。どちらかと問われれば人間性善説なのですが、最近の残虐非道な事件を見るにつけ、人間は生まれつき善にも悪にもなれる両性を、本性として持っていると思うようになりました。そうでなければ、世界で日常生活を揺るがす凶悪な犯罪がこうも次から次へと起き得ないと考えるからです。だからこそ、人間には生まれた時から、躰や教育が必要であり、人間が人間として生きる根本としての宗教心や公德心を学び、養うことが大切なのです。

日本は今、社会全体が行き詰まり危機的な状況にあり、明治維新、第二次世界大戦に次ぐ第三の危機にさらされています。

日本再生のためには国全体の構造改革が必要ですが、とりわけ教育改革なくして国の再生はないものと、私は断言します。

教育は国家百年の大計ですが、ともすれば、教育は金がかかっても直ぐには実効性が無い。自分たちの世代には関係無い。教育は学校でやればよい。などと自分の子供でない故に、他人ごとのように言う人がいますが、そうではありません。福祉や社会保障、医療などの社会制度の多くを今の子供たちが担うことを、私たちは理解しなければなりません。その子供たちの置かれた現状を知りながら放置することは、自らの責任を回避する行為以外のなにものでもありません。

本来、躰は家庭でされるものですが、「大家族制度」がシステムとして立派に機能し、家庭で躰がなされていた時代のように、全てを今の家庭に求めるのは無理があります。だとすれば、代わりにその機能を果たす仕組みが必要となります。教育関係者や専門家は、地域社会にそれを求めているようですが、実際それは理想論にしか過ぎません。自分の子供でさえ持て余しているのに、本気で地域社会にそれができると思っていたら大きな誤りです。

子育てや、教育に多額のお金が掛かることはどこでも同じです。であるならば、保育所や幼稚園、学校にその機能を持たせるほうが実効性も上がり、得策ではないでしょうか。家庭に代わって幼児期から躰を教えるのです。

これだけ女性の自立と社会進出が進んだ時代にあっては、両親のどちらかが子育てに専念するなどということは不可能に近い状況です。そのため、代わりに子育てや躰をする新たな仕組みとして、既存の幼稚園や学校を使うわけです。国や自治体の責任で十分な予算を確保すべきことは言うまでもないことです。

また、同時に幼児期を過ぎてからの教育—「躰」を過ぎてからの「学び」についても見直しが必要です。

今、子供たちの間に蔓延する「学びからの逃避」に対する危機感が高まってきています。子供たちの学力や意識についての各種の調査では、日本の子供たちの学力低下が顕著であり、また、規範意識や倫理観の面でも、主要国間比較を行った場合、かなり劣っている実態が浮き彫りとなりました。

経済協力開発機構（OECD）の生徒の学習到達度調査で、日本の子供たちの国語や数学、理科について「宿題や自分の勉強をする時間」が調査参加国（三十二カ国）中最低であり、「趣味として読書をしない」と回答した生徒は約五十三%で、やはり参加国中最高の数値となっており、いかに勉強や読書をしていないかが、如実に現れています。

また、アメリカの教育学者による「ゴーマンレポート第一〇版」（一九九七年）によれば、日本の最高学府と言われている東大であっても、その「学問の質」は、アメリカ、カナダを除く世界の四十七大学中四十一番目と、驚くほど低位に位置付けられています。また、教授の質による格付けでも、四十九大学中四十三位という結果となっています。

「新しい時代の教養教育」のあり方について、先に文部科学大臣に答申を行った中央教育審議会の答申書でも、その危機感にはじみ出ており、「わが国の伝統や文化、歴史に対する理解を深める」、「自然や物の成り立ちを理解し、論理的に対処する能力を身につけること」、「社会とのかかわりの中で自己を位置付け律していく力、向上心や志を持って生きること」、「礼儀、作法など型から入り、身体感覚として修養的教養を身につける」などの記述があります。

この目標は、従来の知識偏重教育の反省に立ち、総合的な理解力や判断力を培おうとするだけでなく、従来、家庭や社会とのかかわりの中で子供たちが主体的に学んでいた倫理教育の分野にも力点を置こうとするものです。歴史や文化に対する理解、正しい判断力、倫理感や規範意識、さらには向上心を身に付けることが掲げられていますが、果たしてこれは実現可能でしょうか。

今年の四月から学校週五日制が完全実施されましたが、早くも新学習指導要領の是非が問われています。

一九八一年から行われた改革「ゆとり教育」は、日本の教育に重大な弊害をもたらしました。「ゆとり教育」とは、授業についていけない子供、いわゆる「落ちこぼれ」をなくすことであり、「できない子供」のペースに合わせた授業を行うということです。それによって子供たちの学びの状況は悲惨な結果に陥りました。

テストで常に高得点を取る「できる子供」にとっては、やさしい問題ばかり試験に出されることによって、丸暗記すればそれで事足りるという学習方法を身につけ、結果として、試行錯誤しながら自分なりに答えを出すという学習方法を失ったものと思います。

これが、完全週休二日制の実施によってどう変わっていくのでしょうか。これに伴い授業内容は約三割、授業時間数も年間約七十時間減っています。授業内容、授業時間の両方を減らした上で、教育の質を高めることは絶対に不可能です。教職員の週休二日制実現のために、教育時間が削減されただけであり、そのツケは家庭（子供）に回ってくるだけの結果に終わることが危惧されます。

今日の教育の抜本的改革のために第一に手がけなければならないことは、教育時間の削減ではなく、むしろ増強であり、教職員の資質向上であると私は考えています。

資源小国日本の宿命

日本は戦後、驚異的な復興を遂げましたが、ここで一つ忘れてはならないことがあります。それは、復興の影には、アメリカの強力な後押しがあったことです。

終戦直後、天皇陛下ご自身が時の占領軍司令官マッカーサーを訪れ、戦争責任の一切をご自身が認め、国民の救済を申し入れられたことと、それによりマッカーサーが非常な感銘を受けたということは、多くの国民の知るところですが、こうも急速に経済発展を成し遂げられた背景には、当時の国際的緊張とアメリカの外交（国防）戦略が

あったということに私たちは気付かなければなりません。

戦勝国アメリカが、敗戦国日本にどうして強力に、そして熱心にテコ入れをしたのか。

その理由は、その後の国際情勢の変化にあります。朝鮮動乱をはじめ、米・ソ（東西）の冷戦構造の始まりによって、西側諸国の盟主であるアメリカは日本を必要としたのです。つまり、日本は極東地域での西側諸国の防波堤、橋頭堡となるかわりに、日米安保条約によって国を守ってもらい、経済支援を受けることによって、ひたすら復興に没頭できたのであり、その結果、奇跡的な経済発展を遂げたということです。

裏を返せば、東西の冷戦がなければ、こうも急速に立ち直れなかったのです。その証拠に、経済的な成長により日本がアメリカと比肩し得るほどの力を持ち、東西冷戦構造が崩壊し国防上の必要性が薄れるとともに、アメリカは強硬な日本バッシングへと転じました。

そのため、日本はやむなく内需拡大の道に進まざるを得ず、その後、バブルの崩壊へと向かいます。結果はご承知の通りです。

終戦後、経済的利益の追求、規模の拡大のみを目標としてきた日本の社会全体は、バブル終焉後十年を過ぎた今も、その後遺症から立ち直れず、自信を喪失しかけています。

ここで考えなければならないのは、資源小国日本が世界に生きる道を自覚することです。それは、世界に必要と認められる国になることです。バブル崩壊後の「失われた十年」から、未だに立ち直れないでいるのが現状ですが、一刻も早く、国の構造改革を成し遂げなければならないのは言を待ちません。

また同時に、チャンスは一瞬も見逃してはなりません。日本は国際社会において生きる道に絶えず目を凝らし、チャンスには素早く行動に移し、世界に存在感をアピールすることが必要です。それが資源小国日本が世界に生きる道であり「宿命」であるということを、肝に銘じなければなりません。

昨年九月、アメリカで同時多発テロが起こった際の日本の対応は素早いものでした。

十年前の湾岸戦争の時には、その対応に遅れを取り、最終的には経済面を中心とした協力はしたものの西側諸国の不興を買いました。その時と比較すると、今回、日本はいち早くテロに対抗する断固たる姿勢を打ち出したため、アメリカはその対応を評価して、ブッシュ大統領が来日した際には、感謝の言葉を述べるとともに、パートナー国として必要性を再度認め、強調しています。

しかし、これはあくまでも日本が西側の一員として認められたものであって、全世界から認められたものではありません。事実、日本の文化にも詳しい中東の有識者にはこのような声もありました。

「日本は二〇〇〇年に及ぶ歴史と伝統を持つ国であり、その社会規範や倫理観、世界観にはアラブ社会との共通性も見受けられる。そして、欧米とは異なり日本はアラブ世界と直接の利害が薄い世界の大国として、中立・公正な対応と和平に向けての独自の行動を期待する声もあった。しかしながら、今回日本の取った行動は単にアメリカに追随する行動のようにも映り、二〇〇〇年の歴史を有する国が、なぜ建国以来たかだか二〇〇年ほどの国に盲従するのか、という失望の声も聞かれる。」

日本のこれまでの外交姿勢を考えた場合、政治・経済の両面で日本は西側諸国と長年にわたる深い関係があり、簡単に独自路線を進めるものではないと思います。しかし、確かに日本が世界に認められる国となるためには、時々の情勢や利害に流されない、確固たる哲学と外交理念、さらには外交姿勢をアピールしていく必要があります。そうして初めて、世界の人々にとって敬意を持って受け容れられる国となることが可能なのです。そういう観点から見ると、今回の日本の外交では、まだ、日本の哲学や外交理念が十分アピールし得たものとは言えないように感じます。

このアメリカとイスラムの対立について、日本屈指の哲学者であり歴史学者でもある梅原猛先生が、たいへん興味深い指摘をされています。梅原先生は、昨今の青少年非行の防止のために道德教育にご尽力されており、昨年、京都の洛南高校付属中学校で行った授業の内容を「梅原猛の授業一仏教」という一冊の本として出版されました。

その本の中で、先生は、今のアメリカとイスラムの対立の背景にあるのは、キリスト教とイスラム教の一神教同士の対立であると指摘されています。そして、この一神教同士の対立は、古くは十字軍の時代からの因縁とも言えますが、このまま互いに正義を振りかざし対立を続ければ、ことによっては第三次世界大戦へと発展し、人類は滅亡するかもしれない。それを避けるためには、彼らが正義という思想の元にある自己の欲望を絶対視する思想を反省し、憎悪の根を絶たねばならないと述べられています。これに対して多神教である仏教は、唯一絶対の神を持たず、多くの神々の存在を認めており、唯一絶対の正義よりも様々な考え方を認め合う寛容の徳を大切にします。今、世界で求められているのは、正義の徳よりも寛容の徳、あるいは慈悲の徳であり、仏教国日本はこの仏教の考え方に基づき世界の和平運動の先頭に立つべきであると述べられています。

また、同時に、東西のイデオロギー対立が社会主義国家の崩壊によって終焉した今日、「グローバリズム」||「アメリカ型の資本主義の支配」と考えられており、実際それが進行しつつありますが、それは理想的な社会像とは言い難いとも述べられています。苛烈とも言える自由競争の結果、一握りの勝者が巨額の富を独占し、大多数を占める敗者が貧困にあえいでいるのが今日の自由主義経済の現状であり、やはり、未来につくるべき社会は、金持ちも貧乏もない、皆が仲良くやっていける、ソビエトともアメリカとも違う、新しい社会のモデルが模索されなければいけないという、示唆に富んだ指摘もされています。

東西の枠組が崩壊し、EU（ヨーロッパ連合）に見られるように国という枠組みさえも取り払われつつある今日、世界においては、環境との共生、人種間の共生、異なる宗教やイデオロギー間の共生など、さまざまな「共生」、「調和」ということが大きなテーマとなっています。

二十一世紀、世界は「競争」から「調和」へと、新たな一步を踏み出すことが求められており、そのための新たな枠組みや、新たな秩序が模索されています。

まさに、日本が伝統的に保持してきた「和」の思想を生かし、世界平和と調和の取れた国際社会の実現に寄与すべき時代となっているのです。

変革の時代 | 新しい秩序の構築

二十一世紀は「変革の世紀」と言われていますが、それはとりもなおさず「古い秩序の解体と新しい秩序の構築」が求められているということです。

「時は流れ去るのではなく、積み重ねられるものである」という言葉がありますが、私は札幌市議会議員として十一年余、市民のため、そして札幌市の発展のために全力を挙げて取り組んで来ました。この間、自分の努力の積み重ねが、少しずつでも成果として現れてきたことは、議員として大きな喜びでした。

しかし、その一方で、ほとんど進展が見られず、切歯扼腕することが数多くあったのも事実です。

その代表的なものが、札幌市における行財政改革でした。これは他の大都市でも同様ですが、改革が進まない原因として第一に挙げられることは、職員の意識が低く、改革の必要性が意識されないことであり、生産性・効率性の低い職場であっても、自己保身や組織防衛のために改革に否定的なことです。

また、二つめには、行政改革が市民サービスの低下につながるという反対論に押されて手をつけようとしないう風潮があったこと。三つめには、国や道、あるいは他の政令指定都市での取り組み状況ばかりを気にする、強い横並び意識があったことが挙げられます。

民間にできることは民間にやらせるべきというのが私の持論であり、行財政改革は市民が最も望んでいることであるという確信を持って取り組んできたところですが、近年、学校給食の完全委託化やバス事業の全面民間委譲、さらには清掃事業や職員給与

の見直しなど、いくつかの改革が実を結びつつあります。

私は、政治に課せられた使命とは何かと、常々自らに問い続けていますが、究極的には、それは「古い秩序の解体と新しい秩序の構築」にあるのではないかと考えています。

私たちの社会は、政治、経済、福祉、教育など分野を問わず様々な仕組み（ルールやシステム）によって成り立っていますが、時代の大きな転換期においては、旧来のルールやシステムでは、将来的には社会が立ち行かなくなることが起こります。そのような時に、将来を見通し、新しいルール、新しいシステムを構築する、そのような改革を行うことこそが、政治の果たすべき役割だと考えます。

国際社会においては、かつての二極構造が崩壊し、多極化の時代を迎えています。日本の社会も国際化、情報化、少子・高齢化など、大きく、しかも急激に変化しています。その規模は社会の基盤を揺るがすほどのものであり、いまだかつて経験したことのない大きな変革の時代に遭遇しているという認識を、改めて持つことが政治に携わる者には必要です。そして、新しい時代に対応した新しい社会を創造するために、解体すべき古い秩序（仕組み）は何で、構築すべき新しい秩序（仕組み）は何なのかを見極めることなしには、政治家としての責務を全うすることは不可能と言っても過言ではないと考えるのです。

さて、明治以降、連綿と続いてきた国と地方の上下関係は、これまでのキャッチアップ型の社会にあっては一定の成果をもたらしてきました。しかし、その一方で過密と過疎や地域の没個性化は一段と進んでおり、画一性と公平性を重視してきた中央集権型の行政システムは、今、制度疲労を起こしていると言わざるを得ません。

このような国と地方の関係の見直しのため、平成七年には地方分権推進法が成立し、その後、平成十二年四月には、地方分権一括法が施行されました。

私自身、平成十一年から十三年三月までの二年間、札幌市議会においてこの地方分権のあり方を調査・審議する税財政・地方分権調査特別委員会の委員長を務め、この問

題に取り組んできました。

地方分権の動きは、地方自治体の権限・機能をより充実強化しようとするものですが、その道筋はまだ緒についたばかりであり、国がどこまで権限を委譲するのか先行き不透明な部分が多いのが現状です。しかし、今の地方分権体制には、かねてから様々な限界や課題が指摘されていました。大きくは国の省庁の許認可権限と財源配分の問題です。

地域住民の生活に密接に関連した行政分野の事務については、最も基礎的な自治体である市町村に権限委譲されていますが、実質的には許認可権限が国に留保されていたり、様々な行政指導（通達行政）によって国の監督下に置かれている状況が続いていました。

また、国と地方の間の財源（税）配分の不均衡を是正するための制度である、地方交付税や国庫補助金の交付を通じて、地方公共団体の事業に対しても、国の強い関与が行われてきました。いわば、「金も出すが口も出す」という仕組みです。

このような仕組みは、上下水道や道路整備など基礎的な社会基盤整備のように、全国一律の基準によって水準アップを目指している間は有効に機能してきました。しかし、日本の社会全体が行き詰まり、それぞれの地域が、その独自性や独創性を生かした施策を展開して、生き残りを図らなければならない今日のような状況では、むしろ制約となっている状況があるからこそ、地方分権ということがクローズアップされているわけなのです。

地域社会の多様な個性を尊重する住民主導の行政に改革することが、これから進むべき地方分権であり、従来の「画一と集中」のためのシステムを解体し、新たに「多様と分権」のためのシステムを構築することが、今、必要とされているのです。

また、国と地方の上下関係と同じような構図は、「官」と「民」の間にも見られました。日本はこれまで、自由主義経済を標榜しつつも、実は様々な規制や優遇措置などによって社会主義的な産業政策、経済政策を続けて来ました。農林水産業、工業、流

通業、金融業など多くの産業分野において、企業の自由な競争を抑制するとともに、弱小企業に対する手厚い救済措置を施すことによって、日本の産業全体の底上げを図ってきたのです。

いわば産業福祉政策とも言うべきこのような政策は、雇用の安定や国民の所得水準の向上などに寄与してきました。しかし、その一方で、企業の国際的な競争力の低下や、非効率的・非生産的な産業構造、さらには依存的な業界体質などといった弊害をももたらしました。

IT技術の進展によって、今後ますますボーダーレス化、グローバル化が進み、地方の企業であっても過酷な国際競争にさらされる時代となることが予想されます。雇用の安定確保のためのセーフティネットを構築することはもちろん必要ですが、大胆な規制緩和によって国際競争に耐えうる、強靱な足腰を持った企業の育成を図らなければなりません。

昨今の日本の社会情勢を考えますと、この二十一世紀の始まりという時代に、まさに「世紀始まりの苦しみ」を味わっていると言っても過言ではありません。

特に私たちの住む札幌、北海道は、一段と厳しい状況に置かれています。喫緊の課題である景気対策以外にも、少子高齢社会における福祉の問題、環境問題など課題は山積しており、これらの課題を私たちはどうしても解決していかなければなりません。どれも深刻で困難な課題です。しかし、二十一世紀に至るまでに幾度となく困難を乗り越えてきた英知と勤勉さが、私たち日本人には備わっています。政治の舵取りがしっかりしていれば、必ずや克服できる問題であると私は考えます。

北海道の歴史は、本州の他の都府県とは異なり、開闢以来たかだか百三十年であり、この歴史の浅さが大きなハンデとなっていることは確かです。しかし、私たちの主体的な取り組みによってこの困難を乗り越えてこそ、札幌も飛躍的な成長を遂げられるものと、私は信じており、そのために尽力する決意でおります。

結びにかえて

さて、今日のわが国は、明治維新、第二次世界大戦に続く第三の危機にあるといわれています。しかし先に述べたように、敗戦によって日本は初めて他国による占領を経験しました。また、特に幕末から明治にかけては、倒幕という内戦のさなかにあり、さらには他国により植民地化されるという危惧をもはらんだ国家存亡の危機の時代でした。今日の日本は、確かに危機的な状況にはありますが、その程度は比較にならないものと思います。

明治維新とは、一八六八年の大政奉還から明治政府の創立に至るまでの一連の政治改革を指しますが、幕藩体制という封建社会から、資本主義と中央集権体制の導入により近代国家としての礎を築いた非常に大きな変革の時代でした。そして、この激動の時代において国家存亡の危機を乗り越え、変革の偉業を成し遂げた担い手たちは、ご存知のとおり坂本龍馬をはじめとした当時としては無名の藩士たちでした。

江戸時代の教育機関といえば、諸藩がその藩の子弟を教育するために設けた学校である藩校（藩学）が主であり、盛岡の南部藩が一六三六年に設置した御稽古場（後に作人館となる。）がその始まりで、島津藩（鹿児島）が一七七二年に造士館を設置するまで、その数二十一校を挙げることができます。

この藩校のほか、庶民の教育機関として生まれたのが寺子屋です。庶民の子弟に読み書きやそろばんを教えるために武家や寺社に設けられたものですが、この寺子屋から発展した私塾で最も有名なのは、吉田松陰が一八五六年に開いた松下村塾で、明治維新の立役者となった木戸孝允、高杉晋作らを輩出しています。

幕末から明治を生き抜いた維新の志士の生きざまは、多くの著作やドラマによって語り尽くされていますので、ここで改めて語るまでもありませんが、この藩校や寺子屋で教育を受けた多くの人々がその下支えをしたのです。

彼らがそこで学んだのは、政治や経済の知識ではなく、困難に立ち向かう勇気や忍耐力、あくまでも理想を追い求めようとする向上心であったり、さらにはより良い社会

を築く使命感であったのかもしれませんが。

権力や財力とは無縁の立場に生まれたにもかかわらず、幕末から明治という激動の時代に、日本の舵取りを決定するという偉業をなし得た彼らを支えたのは、それまでの教育であり、それは藩校における武士道教育や、寺子屋における修身教育の中で培われたものだったように思います。また、そのような彼らであったからこそ、明治期において教育に心血を注いだものだといえるのではないだろうか。

国づくりとは、人づくりであり、教育です。世界に信頼される国家となるためにも、まず、親子（家庭）、教師（学校）、地域住民同士が信頼できる社会を作らねばなりません。私は、躰や教育がしっかりなされれば、必ずやこれまでののがわが国が誇りにしていた、日本の心、日本の精神を取り戻すことができ、祖先を敬い、隣人を愛する国民になり得ると信じています。

私たちは、今こそ国家建設を成し遂げた先人たちの英知に学び、健全にして光輝ある信頼される国家として、わが国が世界の中で確固たる地位を築くためにも、国民一人ひとりが、戦後失った日本の精神や礼節を今一度真摯に考え、日本文化と伝統に立脚した誇りある国づくりを実現しなければなりません。

折りしも、昭和天皇御生誕一〇〇年に当たる昨年十二月一日、敬宮愛子内親王殿下が御誕生になられたことは、皇孫殿下の御誕生を一日千秋の思いで心待ちにしていた多くの国民に、この上もない慶びと深い感銘をもたらしました。絶えることなく連綿と続く皇室の存在は、正に日本の誇るべき伝統と文化を今に伝えるものです。私たちは、悠久の歴史に育かれた伝統と文化を継承していかなければなりません。

「姓名と生命」で述べたように、神秘的な造物主は、自然を造り、人間には万物の中で最も優れた、精神という霊妙で不思議な力を与えました。精神の意義と道理については先に述べましたが、精神は不思議な力を発揮します。

私たち人間は物心相まって自己を完成します。人格も同様に相互して進歩します。困難な境遇は常に人格に試練を与えるものでありますが、私たちは人格的価値（人間と

しての真価)を発揮することによって試練を乗り越えることができ、同時に、自らの価値を表わすことができるのです。

今、日本が非常に困難な状況に置かれていることは、国民の誰もが等しく自覚していることです。

日本が国家として人格的躍進をするのは、今この時をおいて他にありません。私たちは持てる能力に誇りと自信を持たねばなりません。日本民族が持てる精神的威力を発揮するのはまさに今なのです。

人づくりー教育立国を目指さずして、国家の興隆はありません。世界に貢献し得る人材を育成することこそ、わが国が世界に生きる道であり、それはわが資源小国日本が困って立つ宿命なのです。